

東京音楽大学大学院博士後期課程2017年度共同研究 発表《リズム×創造性》[ちらし]

出演者	栗原光太郎、仲田みずほ、瀧上ラファエル広志、石原勇太郎
内容記述	2017年12月14日 14:00より 東京音楽大学A館200教室
URL	http://id.nii.ac.jp/1300/00001201/

2017年12月16日(土)

14:00より(13:30開場)東京音楽大学 A200教室

入場無料・聴講自由

共通テーマ

《リズム × 創造性》

音楽作品において、リズムはいかに創造性に関わるのだろうか

1年間の研究を通して、4名の参加学生がそれぞれの視点から「リズムと創造性」の関係について論じる

栗原 光太郎 (1年・声楽)

F.P.トスティ歌曲の特徴について

フランチェスコ・パーオロ・トスティ(1846 - 1916)作曲《アマランタの4つの歌》(1907)を分析した結果、彼が詩を大切に、詩と音楽の結びつきを大切に扱う作曲家であったということが明らかとなった。本発表では、トスティの歌曲が具体的にどのような特徴を持ち、それが演奏にどのような効果をもたらすのかを、彼が寵愛した詩人ガブリエレ・ダンヌンツィオ(1863 - 1938)との後期のコラボレーションである《2つの小夜想曲》(1911)を対象曲として考察する。

仲田 みずほ (2年・ピアノ)

A.ソレルの鍵盤ソナタ — 動機の反復から生まれるリズム —

アントニオ・ソレル(1729 - 1783)のソナタに見られる、シンプルな動機の執拗とも言える反復が、大きな時間軸でのリズムを聴き手に感知させるためのものであると捉えた時、彼の音楽がリズムカルな躍動感に溢れていることに気づく。本発表では、ソナタの中で、動機が反復されフレーズが形成されていく様子を観察し、動機の反復が音楽に大きなリズムを作り出していることを明らかにする。

瀧上 ラファエル 広志 (2年・音楽教育学)

拍のないリズムの音楽 — 尺八古典本曲の演奏を事例に —

古典本曲ではテンポ・リズムをカウントせず、曲中のフレーズの流れを通し、音と音を繋いでいくことで解釈・表現する。旋律の流れの中で、伸び縮みする音価、無音、呼吸、また「音色の変化」と「音量の変化」を通して、本曲の表現が生み出される。本発表では横山勝也(1934 - 2010)によって伝えられた古典本曲を中心に、尺八師匠の柿堺香、菅原久仁義による指導、また自らの日本文化の経験に基づき、古典本曲がどのように表現され、どのようにリズムを創造するのかを「間」と「不規則性」という二つの概念に着目して考察する。

石原 勇太郎 (2年・音楽学)

ブルックナーリズム再考 — 《交響曲第4番》の改訂によるリズム変更に着目して —

一般的に「ブルックナーリズム」と呼ばれる2+3あるいは3+2のリズムは、ブルックナーの全ての作品を特徴付けるものとは言い難い。それならば、現在「ブルックナーリズム」と呼ばれているものは、真に「ブルックナーを特徴づける」リズムと言えるのだろうか。そこで本発表では、楽曲の進行と共に核となるリズムが変容するプロセスにこそ、真の「ブルックナーリズム」と呼ぶに相応しいブルックナーの特質があることを明らかにするため、問題のリズムが頻出する《交響曲第4番》の、改訂によるリズム変更に着目し考察を行う。

主催：東京音楽大学 企画：東京音楽大学大学院博士後期課程博士共同研究 A

お問い合わせ：東京音楽大学大学院課(博士課程担当)